

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(13) ナイチンゲール

- ・「看護婦ほどこの世で素晴らしい仕事はない」
- ・「もっとも幸福な人びと、自分の職業をもっとも愛する人びと、自分の人生にもっとも感謝の念を抱いている人々と、それは、私の考えでは、病人の看護に携わっている人びとである」
- ・「1837年2月7日(17歳のとき)、神は私に語りかけられ、神に仕えよと命じられた」
- ・職業を意味する英語の calling、ドイツ語の Beruf がいずれも「呼びかけ」という意味をもっている。しかし、神は呼びかけただけで何をせよと示さなかったところに彼女への試練が隠されていた。
- ・ナイチンゲールは、夏の間過ごすことになっている別荘の近くの村で貧しい病人の世話などをしたことがあった。
- ・24歳のとき、病院に収容されている病人に関する仕事という「天職」の方向をようやく悟った。
- ・いったん「方向」が定まるやものごとには迅速に進む。たまたま身近な者が重病にかかりその看護をすることになり、ナイチンゲールは、自分のみならず誰も病人の看護の方法について教育を受けたことがないという事実衝撃を受けた。
- ・ナイチンゲールは、自らの「天職」を確信し、病院で看護を勉強し看護婦になるという計画を立てる。
- ・当時は、病気になるとかかりつけの医者に往診を頼み看護は家族の仕事だった。病院はそういう余裕のない人がいく一種の貧民収容所、「ジン横丁」をはじめとするロンドンのスラム街に病人をぎっしり詰め込んだような場所、それが当時の病院だった。
- ・ナイチンゲールはヨーロッパ各地の病院の実情について調べ、各種の報告書や統計を集め、そのうえ自ら病院にアンケート調査なども行い、また、ヨーロッパ旅行の折には、いろいろな口実を設けて病院を訪ねたり、看護婦としての実施訓練を受けたりしている。いつの間にか、看護の技術を身に着け病院に関する専門家になった。
- ・「あきらめなどということばは私の辞書にはない」(27歳)
- ・「私はついに自己を確立することができた」(32歳)
- ・33歳のとき、念願かなってロンドンの病院で看護婦の監督として働くことができた(「神の声」を聞いて16年目)
- ・この16年は「アイデンティティ」を確立するための年月。「アイデンティティの確立」とは、要するに「自分の仕事」を持つこと。「青春」とはそのための助走。気も狂わんばかりの長い苦悩と苦闘のはてに、はじめて人間は一人前になる。
- ・仕事は人間を変え、人間をつくりあげる。
- ・看護婦という「天職」に携わるようになってから、ナイチンゲールは、自己の信念を確信し、世の中の悪や不条理を隠さず指摘し、用意周到に自分の意思を貫いてやまないリアリストへ変じていた。

- ・クリミア戦争におけるナイチンゲールの体験は、「仕事が人間を強くし、仕事が人間から力を引き出すものであることをみごとに示す実例」
- ・イギリスにとりクリミア戦争はロシアとの闘いというよりはむしろ病気との戦い。戦死者 1 人に対して病死者 7 人といわれ、クリミアに送られた兵士の半分は病院に入院し、病院で死亡した者の 4 分の 3 は戦傷ではなく、病院でかかった病気、いわゆる「病院病」、疾病だけによる死亡率は 6 か月で 73%にのぼったという統計もある。
- ・イギリス陸軍の病院は、以前トルコ軍の兵舎で、2500 人の収容能力に対して、調理場は 1 つ、調理道具は 13 個の銅の釜がすべて、全く清掃されることのないタイル張りの床はひび割れ、便器も放置。
- ・38 人の看護婦を引き連れたナイチンゲールは、立ちはだかるイギリス陸軍の官僚的組織にもめげることなく、個人の裁量で
- ・徹底的な調査力とプレゼンテーションの技術は、老練な政治家も一目置かざるをえなかった。
- ・だれでも、その気になり、そのための努力をすれば、たいてい分野になれることを、ナイチンゲールは思わせてくれる。
- ・ナイチンゲールは何度も危篤状態を体験し、目の前の死を意識し、死が訪れる前に山積みする仕事を片付けようと全力投球。ペンを持つ手が活動していないのは眠るときだけだった。
- ・「完全なもの以外は失敗」「すべてを思い通りに成し遂げるのでなければ、何もなさなかったのと同じである」「重病といえども仕事はできるということは、この私が証明済みなのだ」

<看護覚え書き>

- ・看護婦が歩くときにたてる絹ずれの音でさえ患者にはひどく耳ざわりに響くものであること。
- ・家族が医師と病室の入口や廊下でひそひそ話をしているのを耳にして患者は不安にかられ、病状が悪化することもある。
- ・よい看護婦は患者に向かって、どう感じているのか、どうして欲しいか、といった質問はめったにしないものだ。
- ・看護婦の最上の働きは、患者に看護の働きをほとんど気づかせないことであり、ただ患者が要求するものが何もないと気づくにいったときだけ、患者に看護婦の存在を気づかせることなのである。
- ・患者と話をするときには、常に患者の視野の中に坐ること、だれでも無意識のうちに相手の顔を見ようとするものである。
- ・周囲の人間のためらいや優柔不断、これらはすべて患者にとって恐怖である。
- ・よい看護とは、あらゆる病気に共通することまでしたこと、および一人ひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること、この 2 つだけで成り立っている。
- ・自分自身は決して感じたことのない、他人の感情のただ中へ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事はほかにない。
- ・よき看護人の資質は、同時によき人間の資質にほかならない。
- ・もっとも幸福な人びと、それは病人の看護に携わっている人びとである。